

自分を「成長」させるという事

6年 K・Nくん

この本を読み終えた時、僕は戸惑った。感想を述べようにも語るべき言葉が見当たらなかつたのだ。登場人物と年が近いから、この感情は「共感」なのだろうか。いや、違う。彼らの体験は余りに壮絶で僕のそれとは全く別物であるし、簡単に比べられる物ではないと思う。では、壮絶な体験から心を晴らした彼らへの「嬉しさ」や「安心」はどうか。もちろん感じたが、これらは僕の抱いた感情の一部分に過ぎない。又、例えハッピーエンドで終わっていたとしても、何か受け入れられないものがあつた。読み終えて暫く経ってから気付いた。この複雑な感情の大部分は「反発」によつて構成されているのだ。

「まっすくな地平線」は、「考え方や生き方が違う」事を理由に両親が別居し、何の予定もない夏休みを持って余していたある日、三年前知り合つた王明明という女性が悠介を訪ねて来、日本人とは異なる距離の縮め方をする。しかし、その後高熱を出した悠介の様子を疎に見ようとしぬい母親に悠介は反発し、王明明の次なる目的地、大阪までついていくが、大阪でも振り回された為に激怒する。だが其の時、悠介は王明明の辛い過去を知り、互いに理解し合う、というよつな物語だ。

「異文化の人間土が理解し合う」

惟こそあの「反発」の正体なのである。「異文化の人」、惟は外国人の事を指す。外を歩くだけで見掛ける外国人。しかし、そんな外国人に挨拶をしたり、話し掛けたりした事の有る人は恐らく極僅かだろう。僕自身、外国人に挨拶をしたり、話し掛けたりした回数、多分、指折りをする程しかない。又、最近、日本人同士や家族同士でも「理解し合う」事が少なくなつて来ているそうだ。そこで、僕は周囲の人と「理解し合う」という事を実践して見た。すると、理解し合つていくうちに、「楽しさ」と「気持ち良さ」が分かつて来た。理解し合う事で得られる爽快感、悩みがなくなつた時、感じる解放感、其の二つの事によつて、自分と相手の顔と心の中に広がる「笑顔」。惟らは全て、自分の「成長」であるかのよつにも思えた。

「有りとも有らぬ人と理解し合う」

即ち、惟は自分を「成長」させる事である。又、自分ばかりではなく、相手も「成長」する事ができる。「有りとも有らぬ人」には、「外国人」も含まれる。惟から日本を訪れる外国人観光客は、恐らく、年々増えていく、という事は、惟から更に自分を「成長」させるには、外国人と理解し合う必要がある。だからこそ、僕は、信じたい。人間の、自分を「成長」させたいと思つ向上心。